

洗平 気迫の完封

父・兄に続く背番号1「優勝旗持ち帰る」

第105回 全国高校野球選手権大会

八学光星の2年生左腕洗平比呂(16)が、背番号「1」を背負って甲子園に戻ってきた。七回以外は毎回走者を許したが、淡々とアウトを積み重ねて明後打線を完封。勝利の立役者は、「丁寧な低めを突いて、何とか踏ん張れた」と汗を拭いた。

(本田海輝)

本調子ではなかった。直球は目撃最速の147kmに達し、及ばない141kmが数回出たのみで、ほとんどが130km台。「少し緊張があった」といつ立ち上がりは2者連続四球を与えた。県大会決勝以来という実戦に加え、甲子園独特の雰囲気、持ち前の制球力がわずかに乱れた。

それでも昨夏の大舞台を経験しているエース。女房役の藤原とも相談しながら直球の割合を減らし、内外角にスライダーやカーブを散らしてカウントを整えた。さすがの修正力で要所を締め、「勝てたことが一番、悪い中でもゼロに抑えられたのはよかった」と胸を張った。

八十二一の県大会決勝では、ベースカパーの際に左足を捻挫し涙の降板。甲子園初戦は「ヒンクをしながらの登板だったが、県大会後はけがを治すことに一番重点的に臨んだ。もう大丈夫」。九回2死二塁、

フルカウントの場面では藤原の要求通り外角低めにこの日135球目となる直球を投げ込んで三振を奪い、今大会3人目の完封を果たした。

洗平に「行けるといってまで行こう」と声をかけ、マウンドへ送り出したという仲井監督は「昨年の甲子園から粘り強くなった。球数はあったが、気持ちで乗り切ってくれた」と力投をたたえた。

父・竜也さん(44)、昨年主戦を務めた兄・歩人さん(国学院大1年)に続き、八学光星のエースナンバーを初めて背負った洗平。試合前は普段あまり連絡を取らないという兄から「頑張れよ」とメッセージが届いた。マウンドに上ったら、

背番号が何番でもやることは同じ」と気負いなく、家族の応援も力に変えてマウンドを守り抜いた。昨夏は1年生ながらこの回戦の愛工大名電愛知戦で先発し、5回を1失点(自責点ゼロ)と好投。今年も注目されるサウスポーターは、次から任せられたと、心を抑えらるよう役目を全うする。一つずつ勝って、青森県に優勝旗を持って帰りたいと頼もしく言い切った。

声からしナイン 鼓舞



スタンド応援団

三塁側のアルプススタンドでは、八百市からバス8台で駆けつけた八学光星の野球部員や吹奏楽部員2人と、父母らによる応援団がえんじ色のメガホンで声を張り上げ、ナインに声援を送った。

野球部員で、今春から応援団長を務める穂田崇選手(宮城県出身)と田上凌選手(神奈川県出身)の2人が中心となって場を盛り上げた。

攻撃では指印を響かせ、守備では「大丈夫」「自信を持って」とサインを鼓舞し続けた穂田選手は、回を重ねるにつれて、最高バースデープレゼントを贈ってくれたと喜んでいた。(棟方好華)